コンピュータ言語による意志の疎通

Understanding Communication with Computer Language

反射層付 LED 創始者 [1], 元名工大 [2] ○(PC)諏澤 寛源 [1, 2]

The Originator of DBR-LED [1], Ex-Nagoya Inst. of Technol. [2], °(PC)Hiromoto Susawa[1, 2]

E-mail: automobile_21@yahoo.co.jp

英語は世界共通言語である。しかし、日本語を母国語とする科学者にとって、英語は大きな障壁となる。日本語では、漢字を使用する。この認識は、脳に負担をかける。英語を使用するなら、漢字を廃止し、日本語による表現は最小限にすべきである。例えば、ひらかなのみにすべきである。しかし、現実は、そうなっていない。科学の基礎は数学である。ここでいう数学は算数ではない。数学的思考を司る脳の部位と人間の言語に必要な脳の部位[1][2]は異なる。すなわち、究極を目指したとき、科学の本業と英語とは、トレードオフの関係にある。実際、前例にこだわり、海外では考えられない本末転倒な事態、想定外な事象が多く発生している。一方で、数学の得意な人は、コンピュータプログラムの作成が得意な人が多い。コンピュータ言語は世界共通である。そこで、意志の疎通の手段として、コンピュータ言語を使用することを提案する。

英語に限らないが、英語では、関係代名詞等が、あいまいな表現を産む原因になる。このような表現で、賢さをアピールすることもあるが、科学の世界では控えたい。英語が母国語でない人の障壁になる。また、コンピュータで文献を整理する場合も障害となる。米国特許では、このような表現は避けられる。稚拙とおっしゃる人がいますが、関係代名詞は使用せず、その都度、「This」等を使用して、指し示す。コンピュータ言語では、このような曖昧さはなくなり、パーフェクトな表現になる。ただし、括弧が何重にもなり、見にくくはなる。しかし、これは、エディタ等で見やすくできる。エディタは、linux 等をインストールしたときに、既に使用できるようになっている。

SF 映画等で、オペレーターが、マシン語あるいは何らかの dump 情報を画面に映し出して監視している場面が出てくるが、これは、SF の世界だけでなく、現在、既に可能な方がおられると思われる。科学者は、特別なデバイスを使用しなくても、CRT とキーボードだけで、コンピュータを自分の脳として使用することができる。一方、フリーソフトは、マニュアルが整備されていないことが多い。そのとき、ソースコードが公開されていることが多く、ソースコードがマニュアルとも受け留められる。

応用物理分野では、研究方法がパターン化しており、研究活動が全自動になる可能性がある。論文の形式は、序論、実験方法、考察、結論と既にパターン化している。論文生成も自動化することが予想される。論文をコンピュータ言語で書けば、パーフェクトになる。

現在では、30 年前に比べて、数学の習得に費やされる時間が少なくなっているようである。是非の判断の基礎は数学だが、それがない可能性がある。上述の前例、本末転倒、想定外は、この部分が大きく寄与していると考えられる。この状況で、問題提起、自身による理論構築は難しい。しかし、数学の習得を厳密に実施すると、中退者が続出する。そこで、数学的才能を活かすために、多くの人が習得しているコンピュータ言語: C 言語系の言語を使用し、自然現象の記述を試みる。特に、理解が不明瞭になる点を解決する。

References [1] https://en.wikipedia.org/wiki/Broca's_area. [2]同directry/Wernicke's_area.